

# 行為者性の階層理論とアイデンティティの問題<sup>1</sup>

## Hierarchical Theories of Agency and the Problem of Personal Identity

川 瀬 和 也

本稿の目的は、行為者性に関する階層理論を整理し、その射程を明らかにすることである。現代行為論においては、心的態度の階層によって自律を説明し、これを通じて行為者性とは何かを明らかにしようとする階層理論が影響力を持っている。本稿では、H. G. フランクファートの階層理論、M. E. プラットマンの計画理論、C. M. コースガードの実践的アイデンティティに訴える理論の三つを、心的態度の階層性に加えて何が必要だとされているかという観点から整理する。また、特にプラットマンの計画理論と、コースガードの実践的アイデンティティに基づく理論を比較し、両者において人格の同一性についての理解の違いが問題となっていることを示す。また、人格の同一性の捉え方によって、「操作の問題」への応答が変わることを明らかにする。これを通じて階層理論にとって人格の同一性をめぐる問題の重要性が増していることを明らかにする。

キーワード：行為の哲学、自律性、行為者性、人格の同一性、実践的アイデンティティ

### 目 次

- I はじめに
- II 意図的行為から自律的行為へ
- III 三種類の階層理論
- IV 階層理論と人格の同一性
- V 操作の問題と実践的アイデンティティ
- VI おわりに

---

## I はじめに

近年の行為の哲学においては、自律の問題の重要度が増しているように思われる。本稿の目的は、このことを確認したうえで、自律的行為をめぐる議論を整理し、その射程と限界を検討すること

である。この作業を通じて、これからの行為論が進むべき道筋について考えたい。

1980年代ごろまでの行為論においては、意図という観点から人間の行為に光を当てることが目指されてきた。『インテンション』に代表される G. E. M. アンスコムの著作や、『行為と出来事』に収められた D. デイヴィドソンの諸論文では、行為の分析における意図の位置づけや意図的行為と非意図的行為の区別が最大の問題であった。

しかし、近年の行為論においては、必ずしも意図の問題ばかりが常に正面から扱われるわけではなくなってきているように思われる<sup>2</sup>。その背景の一つに、行為を自律性の観点から分析しようとする研究が増えてきたことが挙げられる。本稿ではこの流れを整理し、その射程を考える。最終的に、現代の行為論が人の自律性やアイデンティティについての哲学的議論と密接な関わりを持つようになっていくことを明らかにする。

## II 意図的行為から自律的行為へ

行為論において自律的行為が関心を集めるようになった経緯を描き出すにあたって、デイヴィドソンの行為論を振り返ることから議論を始めることは理にかなっているだろう。1980年代から90年代の行為論において、デイヴィドソンの理論はまさにスタンダードであった<sup>3</sup>。以下、これを「標準理論」と呼ぶ。論文「行為・理由・原因」で提示された初期の理論においては、すべての行為は何らかの記述のもとで意図的な行為であり、行為は賛成的態度と信念を基本理由として持ち、かつその基本理由は行為の原因でもあるとされた (Davidson[1963]2001a)。この理論においては、行為における意図は存在者としては消去された。

このデイヴィドソンの理論は強い影響力を持ったが、それゆえに多方面からの批判にもさらされ、さまざまな問題を抱えていることがすでに明らかになっている。本節では第一に純粹意図の問題、そして第二に行為者不在問題に焦点を定め、これらの問題を乗り越えるためになされてきた議論の展開をたどる<sup>4</sup>。

純粹意図、あるいは事前の意図とは、行為に先立って形成される意図のことである。デイヴィドソンはすでに述べたように、初期の理論において、行為に際して同時に働く行為内意図の存在を否定した。しかし、その後のデイヴィドソンは、「意図すること」において、純粹意図の存在を認める (Davidson [1978]2001b)。デイヴィドソンは、純粹意図を欲求でも信念でも行為でもない「全面的な判断」として分析したが、その説明は十分な説得力を持ってはいなかった。

事前の意図は、次のような仕方で行為の哲学に深刻な問題を引き起こす。以前に「 $\phi$ するつもりだ」と述べていた行為者が実際には全く $\phi$ する気配がないとする。このとき、この行為者は不合理であるように思われる。これは、ひとたび $\phi$ するという純粹意図が形成されたならば、それ以後の特定の時点で $\phi$ しないことは行為者にとって不合理となるということを示している。しか

し、「 $\phi$ しようと思っている」と述べていた行為者が、 $\phi$ することに深刻な問題があるとわかったにもかかわらず $\phi$ したならば、このときにも行為者は不合理となるように思われる。したがって、行為者が $\phi$ するという事前の意図を持っているとき、この行為者は合理的である限りにおいて、必ず $\phi$ するように思われ、同時に、必ずしも $\phi$ するわけではないようにも思われる。このような問題を避けるためには、「 $\phi$ する」という事前の意図は行為の直前に再点検される、と修正を加えたくなるかもしれないが、そうすると今度は、「 $\phi$ する」という意図が形成された時点で、行為者は $\phi$ すると決定していたはずだ、と主張することができなくなる。これはすなわち、事前の意図の形成には因果的に何の効力もないと認めるに等しい。

この純粹意図の問題に対する回答として大きな影響力を持ったのが、純粹意図は計画や方針のような計画様態度（plan-like-attitude）であるとする、M. E. ブラットマンの計画理論である（Bratman [1987] 1999）。計画理論の説得力は、事前の意図が行為を直接的に引き起こすのではなく、実践的推論に影響を及ぼすことで間接的に行為を導くという描像にある。計画や方針のような心的態度が一度形成されると、これはその後の行為者の実践的推論に影響を及ぼし、計画や方針を実現へと導く。この意味で計画や方針は、事前の意図の特徴である強い行為指導力を持つ。同時に、計画や方針は、大きく状況が変わったり、深刻な問題が発生した場合には変更されることもある。したがって、計画や方針は強い行為指導力を持ち、ある意味で行為を決定しているといえるにも関わらず、行為の時点までに変更されることもありうるようなものである。このような特徴を持つ態度はまさに、事前の意図として行為の哲学者たちが探していたものではないか、というわけである。

行為者不在問題へと移ろう。デイヴィッドソンの行為論は、行為の説明を行為者なしで済ませ、これによって実質的に行為者を消去しようとするものであった。この議論は、非物理的な実体としての行為者を措定して行為を説明する行為者因果説と鋭く対立している<sup>5</sup>。C. サンディスは、ヒュームの行為論について論じた近著でこれらの立場をスキュラとカリュブディスというギリシャ神話の怪物に例えているが、その後の行為者性をめぐる議論の展開を考慮に入れるなら、この比喩は当を得たものだといえよう（Sandis 2018）。ここ 50 年にわたる行為者性に関する議論は、この両者の間を行く理論をどうにかして構築しようとする試みとして整理できるからである。

この問題を乗り越える理論として強い影響力を持ったのが、またしてもブラットマンの計画理論である。ブラットマンによれば、計画様態度の一種である自己統制的方针は、行為者が持つ様々な欲求のうちどれが行為者と同一化されて、行為へと結実する効力を持つようになるのかを決定する高階の態度である。これは、行為者の自分自身の態度に対する態度であるから反省的なものであり、時間的な幅をもって、ロック的な心理的連続性をもった行為者を形成する（Bratman [2000] 2007a）。計画理論は、純粹意図がもつ特異な行為指導力を説明する理論であると同時に、自然主義と矛盾しない行為者の概念を提示する理論でもあったといえる。こうして、純粹意図の問題と行為者不在問題という、標準理論が抱えていた二つの問題を乗り越える理論として、計

画理論は脚光を浴びてきた。

最後に、このような議論の展開の中で、意図的行為から自律的行為へと行為論の関心の中心が変わってきたことを指摘しておきたい。標準理論においては、意図的行為とは何か、という問いが中心的な問いであった。このような観点から純粹意図という特殊な心的状態が問題になり、また、意図的行為の説明には行為者は不要だとされた。意図的行為と非意図的行為を区別することも、重要な問題であった。一方、計画理論においては、行為の意図性よりもむしろ自律性が問題となっている。自律性を行為の基本的な特徴とみなすことで、純粹意図のような特殊な心的状態に煩わされる必要はなくなった。また、行為の自律を説明するにあたって、行為者因果説とは違う形で、行為者にあたるものが復活させられることになったと言えるだろう。しかし同時に、自律的行為と非自律的行為をいかにして区別するかという新たな問題も生じた。

### III 三種類の階層理論

本節では、「階層理論 (hierarchical theory)」と呼ばれる自律的行為の理論を整理する。階層理論とは、高階の態度に訴えることで行為の自律性や行為者性を説明しようとする立場のことである。計画様態度を前面に押し出すブラットマンの計画理論のほか、ブラットマンに先行して心的態度の階層という考え方に訴えた H. G. フランクファートのよりシンプルな階層理論や、行為者の実践的アイデンティティによって他の態度が統合されるべきだとする C. M. コースガードの立場をこの理論に含めることができる。

階層理論に属する様々な立場は、当然ながら、行為を導く心的態度に階層性があり、これを手掛かりに行為者性をとらえることができると考える点で一致している。しかし、それぞれの立場は、階層性以外に何が必要だと考えるかについて主張を異にする。それゆえ、これらの立場を比較するにあたっては、行為者性のために態度の階層性以外に何が必要だとされるのかという観点から整理することが有効である。以下でもこの観点から、階層理論に属する立場を比較検討してみたい。

初めにもっともシンプルなフランクファートの立場を見ることにしよう (Frankfurt [1971] 1998)。フランクファートの階層理論では、行為者は自分が持つ欲求のうち特定のものが実効的になることを欲するという意味で二階の欲求を持つ。そして、この二階の欲求が満たされている限りで行為者は自由意志に基づいて行為していると言える。行為論の観点からいえば、このとき行為主体は行為者性を発揮して、自律的に行為しているということになる。

階層モデルに対しては、二階の欲求も欲求なのに、なぜ一階の欲求と異なる重要な役割を果たしているのかが不明である、という批判がある。二階の欲求についても、再び行為者がそれに従いたいと思うかどうかを問題にすることは可能なはずである。例えば、行為主体は、特定の一階の

欲求に従いたいという二階の欲求に従いたくない、という三階の欲求を持つことも可能である。このような無限後退の可能性や、特定の高階の欲求が権威をもちうるのはなぜかという問題が、しばしば指摘されてきた。

この問題に対するフランクファートの最終的な回答は、行為者の「満足」に訴えるものである（Frankfurt [1992] 1999）。行為者が高階の欲求に満足しているとき、その高階の欲求によってそれに従うことが欲されているような特定の欲求に従って行為することが、自由意志や行為者性の発露と見なされるようになる。ただし、この回答に対しては、無気力状態での消極的な満足でも十分になってしまうのではないか、という問題も指摘されている（Bratman [1996] 1999）。

このシンプルな階層理論に登場する二階の欲求を、計画や方針として特徴づけるのが、すでに言及した計画理論である。計画や方針は、単なる欲求とは異なり、変更されにくく、時間的な幅をもって持続するという特徴を持つ。ブラットマンによれば、計画には「理にかなった安定性」があり、ひとたび計画を立てたならそれを簡単には変更せず、将来にわたってそれにすることが合理的であることが多い。しかし、計画を再考慮することが合理的になる場合もある（Bratman [1987] 1999, Chap. 5）。これらの特徴は、事前の意図が持っていた、行為を必ず引き起こすようにも思え、同時に変更可能であるようにも思える、という特徴を分析し、不可解でない仕方でも説明したものだといえる。ただし、ここまでのことはフランクファートの「満足を伴う二階の欲求」によっても言えることであり、ブラットマンの説明はそれをより行為論になじみやすい語彙で言い換えただけのように見えるかもしれない。実際、ブラットマンは、これだけではまだ行為者性を特徴づける計画様態度の特徴としては不十分だとしている。計画理論がこの態度にさらに付け加えるのは、実践的推論において行為を正当化する目的を与えるものとして、特定の欲求を取り扱うようにする、という機能である（Bratman [2000] 2007b）。つまり、計画や方針は目的を設定するという機能を持つ。計画は、特定の欲求を目的を与えるものと見なす、という仕方でも実践的推論をコントロールし、これによって行為をコントロールする。ブラットマンの考えでは、これこそが我々が求めていた行為者性であり、自律性である。

階層理論には、計画ではなく実践的アイデンティティという考え方に依拠するものもある。コースガードに代表されるこの考え方では、人の行動は実践的アイデンティティによって統合される限りで自律的な行為となる。すなわち、「行為者性の概念にとっては、行為者が統一されているということが本質的である」（Korsgaard 2009, 18）。この立場によれば、行為主体が行為者性を発揮して行為していると言えるためには、主体がまさに行為者として統一されている必要がある。

さらにコースガードは、行為者性のために行為者の統一が必要なだけでなく、行為によって行為者のアイデンティティが構成されるとも述べている。実践的に推論して行為するとき、我々は自分が「何者であるかを決定している」（Korsgaard 2009, 19）。

それゆえ我々は、他の動物にはない、個別的・個人的な種類のアイデンティティ、すなわち、人格のないし実践的アイデンティティを構成するという仕事に直面しているのである。(Korsgaard 2009, 19-20)

したがってここには、実践的アイデンティティによって統合されていることが行為主体に行為者性を与え、同時にそのように統合された行為が実践的アイデンティティを構成する、というある種の循環構造がある。ただし、この循環構造は、相互に影響を与え合うプロセスではあっても、定義や正当化の循環ではない点に注意が必要だろう。

このように実践的アイデンティティを重視するコースガードの立場が、フランクフェルト的なシンプルな階層理論や、ブラットマンの計画理論と比べて多くのものを行為者に要求していることは明らかであろう。この立場によれば、本人が高階の欲求に満足していることや、それが計画として行為の理由を決定するはたらきを持っていることだけでは行為者性の説明として不十分である。行為やその理由は最終的に実践的アイデンティティといういわば態度の階層の最も上にある態度によって統合されねばならないということになるからである。

#### IV 階層理論と人格の同一性

前節では、行為者性の説明のために、心的態度の階層性以外に何が必要とされるのかという観点から、三つのタイプの階層理論を区別して整理した。本節では、階層理論が、人格の同一性（アイデンティティ）の問題と深く関わることを明らかにする。実践的アイデンティティを前面に押し出すコースガードだけでなく、ブラットマンの計画理論も人格の同一性をどう理解するかという問題と深く関わっている。ブラットマン自身によるコースガード評を手がかりに、このことを明らかにしたい。

まずは両者の類似性についてのブラットマンの言葉を聞こう。ブラットマンによれば、コースガードの実践的アイデンティティの原理と、ブラットマンの自己統制の方針は、「ある欲求を行為の理由として行為者が是認するにあたって本質的なもの」であるという点において一致している。さらに、ブラットマンは次のことを認める。

このような〔自己統制的な〕方針が行為者のアイデンティティと通時的に結合されているということこそが、行為者がどこに立っているかを決定するという、その方針の権威の根拠となっている。それゆえ私〔ブラットマン〕は、このような原理ないし方針と行為者のアイデンティティの諸側面との間に特別なつながりを認めるという点と、その結合を行為者の是認の説明にとって重要なものと見なす点において、コースガードと一致している。(Bratman [2000] 2007a, 41-42)

ここでブラットマンは、私が指摘してきたとおり、コースガードの実践的アイデンティティが自身の自己統制の方針に近いものと認めている。したがって、方針や計画と実践的アイデンティティは同様に階層理論における高階の態度として働くということになる。

それでは両者の違いはどこにあるのか。まずは、実践的アイデンティティは明示的にアイデンティティの把握に関わるのに対して、方針や計画はアイデンティティの把握を常に含むわけではない、ということが指摘できる（Bratman [2000] 2007a, 42）。そしてこの違いは、方針や計画によってもたらされるアイデンティティが「ロック的」であることによる。

自己統制の方針と行為者の通時的アイデンティティとの主要な結合は、[...] ロック的な連続性と結合を構成し支持するという仕方で行為者の時間的な幅を持った生を調整し組織化するという特徴的な役割に基づいている。私の見解では、このような仕方、人格の通時的同一性に関する広義のロック的なアプローチが、行為者の反省的承認の本性を明確化する助けとなりうるのである。（Bratman [2000] 2007a, 42）

ブラットマンはこの「広義のロック的なアプローチ」を認めるかどうかにおいて、自分の立場とコースガードの立場は分かれるのだという。「広義のロック的なアプローチ」ということでブラットマンが念頭に置いているのは、D. パーフィットのように心理的な結合や連続性によって人格の同一性を説明する立場である（Bratman [2000] 2007a, 29-30）。ブラットマンは、コースガードが人格の同一性についてのパーフィットの議論を批判していることをもって、「ロック的なアプローチ」をとる自分とは相容れない立場をとっていると考えているようである。（Bratman [2000] 2007a, 42 n. 57）。

ところが、コースガードのパーフィット批判を実際に見てみると、事態はそれほど単純ではないようにも思えてくる<sup>6</sup>。コースガードがパーフィットの人格の同一性論を批判する最大の理由は、「道徳的観点からは、行為者性を単なる経験の一形式へと還元しないことが重要だ」からである。（Korsgaard[1989]1996, 364）。コースガードはこの点を批判して、人格の実践的な同一性（実践的アイデンティティ）を重視する立場を打ち出す。また、この批判は功利主義への批判や、道徳実在論への批判へとつながっている。

この点に照らすと、コースガードがパーフィットを批判するとき、ブラットマンの言う意味でのロック的なアプローチを批判していたと言えるかどうかは定かではない。なぜならブラットマンは、現代のロック的なアプローチにおいては、心理的連続性が「行為者の活動の帰結」であるということを強調しているからである（Bratman [2000] 2007a, 30）。コースガードのパーフィットへの批判においては、行為者の活動によって人格の同一性が与えられる場面があることを捉えられないという点が問題視されていた。そうだとすると、ブラットマンが自認し、パー

フィットと共有していると考えている人格の同一性についてのロック的なアプローチと、コースガードがパーフィットに帰属させて批判している立場には幾分隔たりがある。もちろんこのことは、ブラットマンの考える人格の同一性とコースガードの考える実践的アイデンティティが同じものであることを意味しない。しかし、ブラットマンの立場はパーフィットとコースガードの中間にあり、どちらかといえばコースガードに近いようにすら思われてくる<sup>7</sup>。

ここまでの議論によって、人格の同一性をどう理解するかという問題が、コースガードのみならずブラットマンの計画理論においても中核に位置していることは明らかであろう。ブラットマン自身、同一性についての理解の仕方を、自らの立場を際立たせるにあたって引き合いに出しているということがわかるからである。さらに、私の考えでは、ブラットマンの計画理論は単に人格の同一性についての理論を含んでいるだけでなく、その正当化のために、コースガード的な行為者としての実践的アイデンティティというアイデアを部分的に導入せざるをえない状況に陥っている。このことについて、節を改めて論じたい。

## V 操作の問題と実践的アイデンティティ

本節では、階層理論にとっての脅威となる「操作の問題」を計画理論がいかにして退けるかを改めて検討する。そのうえで、この問題を退けるに当たって、計画理論がアイデンティティの概念に訴えざるを得ないこと、また、そこで引き合いに出されるアイデンティティの概念が、ロック的-パーフィット的な形而上学的アイデンティティよりも、コースガード的な実践的アイデンティティに近いことを明らかにする。

操作の問題とは、階層理論において自律性を成立させている高階の態度が外から操作されていたらどうなるかという思考実験による、階層理論への反論によって提起される問題である<sup>8</sup>。催眠や、脳に埋め込まれた特殊な機器からの刺激によって、主体が不本意な高階の態度を抱くようになるということは十分想定可能である。この場合に、仮に主体が高階の態度に適合する欲求にしたがって行為していたとしても、自律性や行為者性を発揮しているとは言えなくなる。

この問題は、この批判が直接向けられたフランクファートのシンプルな階層理論だけでなく、ブラットマンの計画理論にも当てはまりうる (Taylor 2005a)。計画理論においては、計画や方針は、特定の欲求を目的を与えるものと見なす、という仕方を実践的推論をコントロールし、これによって行為をコントロールするようなものとされていた。このような機能を持つ態度が全体として操作されているということは、依然として可能である。

計画理論はこの問題を回避できる可能性もある。J. S. テイラーは、人格の同一性についてのブラットマンの議論を発展させることで、計画理論はこの問題を回避しようと指摘している。

ブラットマンの自律性の説明を下支えしている、広義のロック的な人格の同一性の説明を用いれば、この問題に次のように答えられるかもしれない。このような場合には、人の欲求はその人の自我から適切な仕方が生じたとは言えないのである、と。（Taylor 2005a, 13）

しかし、このように言えるのなら、ブラットマンが「ロック的」だと言う人格の同一性についての説明は、コースガードのいわばカント的な実践的アイデンティティにますます接近してしまうように思われる。「自我から適切な仕方が生じた」というテイラーが加える条件は、実践的アイデンティティに適合しているというコースガード的な説明と、どのように違うのだろうか。直ちに同じであるとまでは言えないにせよ、もともとのブラットマンの議論において曖昧だったコースガードとの差異が、いっそう曖昧になっているとは言えるだろう。

以上のように整理すると、高階の態度は実践的アイデンティティであるとするコースガードの階層理論は非常に有力なものに思われてくる。その人が何者であるかを決定するような実践的アイデンティティが、欲求とは異なる仕方でのその人の自律性を構成する権威を持つのは当然だろう。また、実践的アイデンティティは、催眠や操作によって植え付けられたものではありえないだろう。本当のその人とは異なる実践的アイデンティティのようなものを洗脳などによって植え付けることはできるかもしれないが、それはあくまでもまがい物のアイデンティティであり、本物の実践的アイデンティティではないだろう。

そうはいつても、実践的アイデンティティによる説明も万能ではない。ここでは二つの批判を簡単に提起してみたい。第一に、コースガードの議論が持つ強い説明力は、理論の儉約性を犠牲にして得られたものである。計画理論に比べて、実践的アイデンティティによる自律性の説明は、より多くの前提を置いている。そもそも単なる心的態度とは異なる実践的アイデンティティというものを前提しているし、さらには、すでに触れたとおり、この議論は功利主義批判や道徳的実在論批判といった倫理的な議論にまでつながっている。

また、逆に実践的アイデンティティによる説明だけでは、アイデンティティがどのように決まるかを説明できないために不十分だとする批判もある。これはさらに前提を増やすことを要求している点で、儉約性からの説明とは逆の批判である。この批判によれば、コースガードは実践的アイデンティティがカント的な自己立法によって決まるとするが、これは不十分な説明である。実践的アイデンティティは、行為者が所属する歴史や共同体によって影響を受けるからである<sup>9</sup>。

以上の議論によって明らかになったことをまとめよう。まず明らかになったのは、自律的行為が議論の中心に置かれるようになったブラットマン以後の行為論においては、人格の形而上学的同一性や実践的アイデンティティの問題が、行為者性の説明の核心に関わるようになってきているということである。この意味で現代の行為者性の問題へのアプローチは、ブラットマン以前に、専らデイヴィドソンのような枠組みのもとで問われてきた行為者性の問いとは大きく異なる特徴を持っている。また、コースガードの言う実践的アイデンティティと、ブラットマンの言うロック的同

一性の間の違いに曖昧なところが残っているということも、本稿で明らかにすることができた。

## VI おわりに

本稿では、意図的行為から自律的行為へと行為論の関心が徐々にシフトしてきたことを指摘し、その上で、心的態度の階層によって自律を説明し、これを通じて行為者性とは何かを明らかにしようとする階層理論について整理した。その際、この潮流の先駆けとなったフランクファートのシンプルな階層理論、計画や方針を重視するブラットマンの計画理論、実践的アイデンティティを重視するコースガードの理論の三つを、階層性に加えて何が必要だとされているかという観点から比較した。また、階層理論にとって人格の同一性をめぐる問題が従来の行為論とは比較にならないほど重要になっていることを明らかにした。

本稿の議論は、ブラットマン以後の現代行為論が抱える問題を最終的に解決するものであるよりむしろ、行為論が取り組むべき課題のありかを示し、進むべき道を示唆するものであった。最後にこれを改めて展望して結びとしたい。

行為論との関係が深まっていることを指摘した人格の同一性についての哲学的議論は、それ自体、近年になって、大きな展開を見せている。心理的結合や心理的連続性によって人格の同一性を説明する理論に代わって、物語的な同一性を重視する理論が台頭してきたためである<sup>10</sup>。本稿では行為論におけるブラットマンとコースガードのアイデンティティ理解の関係をどう理解すべきかについて論じたが、この行為論におけるアイデンティティ理解という問題も、人格の同一性についての最新の成果を取り入れながらより深められなければならないだろう。

また、階層モデルは決して自律性の唯一の説明ではない。異なる枠組みを採用した説明も様々になされている。これらの説明には、心の哲学の観点や自由意志論の観点からなされた人格的自律の理論から、フェミニズム的な政治哲学とも結びつく関係的自律性の理論まで、様々なものが存在する<sup>11</sup>。行為論において自律的行為の分析の重要性が増してきたことは、これらの自律性の理論から行為論が学べるが増えたということの意味してもいるだろう。

### 参考文献

- Alvarez, Maria. and John Hyman. 1998. "Agents and Their Actions," *Philosophy*, 73(2), pp. 219-245.
- Bratman, Michael E. (1987) 1999. *Intention, Plans, and Practical Reason*, CSLI Publications.

- (マイケル・E・ブラットマン『意図と行為：合理性、計画、実践的推論』、門脇俊介、高橋久一郎(訳)、産業図書、1994年)
- . (1996) 1999. “Identification, Decision, and Treating as a Reason,” in: Michael E. Bratman, *Faces of Intention: Selected Essays on Intention and Agency*, Cambridge University Press. pp. 185-206.
- . (2000) 2007a. “Reflection, Planning, and Temporally Extended Agency,” in: Bratman (2007d), pp. 21-46.
- . (2000) 2007b. “Valuing and the Will,” in: Bratman (2007d), pp. 47-67.
- . (2001) 2007c. “Two Problems about Human Agency,” in: Bratman(2007d), pp. 89-105.
- . 2007d. *Structures of Agency: Essays*, Oxford University Press.
- Chisholm, Roderick. 1966. “Freedom and Action,” in Keith Lehrer (ed.), *Freedom and Determinism*, Rondon House, pp. 11-44.
- Davidson, Donald. (1963) 2001a. “Actions, Reasons, and Causes,” in Davidson(2001c), pp. 3-19.
- . (1978) 2001b. “Intending,” in Davidson (2001c), pp. 83-102.
- . 2001c. *Essays on Actions and Events*, 2nd Edition, Oxford University Press.
- Frankfurt, Harry G. (1971) 1998. “Freedom of the Will and the Concept of a Person,” in: Harry G. Frankfurt, *The Importance of What We Care about*, Cambridge University Press, pp. 11-25.
- . (1992) 1999. “The Faintest Passion,” in Harry G. Frankfurt, *Necessity, Volition, and Love*, Cambridge University Press, 1999, pp. 95-107.
- Friedman, Marilyn. 1986. “Autonomy and the Split-Level Self,” *Southern Journal of Philosophy*, 24, pp. 19-35.
- 福田敦史 . 2014. 「自我性を求めて：物語的自我・現象的自我・脳神経科学」, 信原幸弘, 太田紘史『シリーズ 新・心の哲学Ⅱ 意識編』, 勁草書房, 第5章, pp. 225-270.
- 川瀬和也 . 2018. 「行為者性の社会理論：コースガード・ピピン・ヘーゲル」, 『思想』第1137号, pp. 53-70.
- Korsgaard, Christine M. (1989) 1996a. “Personal Identity and the Unity of Agency: A Kantian Response to Parfit,” in Cristine M. Korsgaard, *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge University Press, pp. 363-397.
- . 2009. *Self-Constitution: Agency, Identity, and Integrity*. Oxford University Press.
- Parfit, Derek. 1984. *Reasons and Persons*, Oxford University Press. (デレク・パーフィット『理由と人格：非人格性の倫理へ』、森村進訳、勁草書房、1998年)
- Pacherie, Elisabeth. 2008. “The Phenomenology of Action: A Conceptual Framework,” *Cognition*, 107(1), pp. 179-217.

- Pippin, Robert B. 2008. *Hegel's Practical Philosophy: Rational Agency as Ethical Life*, Cambridge University Press. (ロバート・B・ピピン『ヘーゲルの実践哲学：人倫としての理性的行為者性』、星野勉監訳、大橋基、大藪敏宏、小井沼広嗣（訳）、法政大学出版局、2013年）
- Sandis, Constantine. 2018. *Character and Causation: Hume's Philosophy of Action*, Routledge.
- Schechtman, Marya. 1996. *The Constitution of Selves*, Cornell University Press.
- Taylor, James Stacey. 2005a. "Introduction," in: Taylor(2005b), pp. 1-29.
- . 2005b. *Personal Autonomy: New Essays on Personal Autonomy and Its Role in Contemporary Moral Philosophy*, Cambridge University Press.
- Velleman, J. David. 1992. "What Happens When Someone Acts?," *Mind*, 101(403), pp. 461-481.
- Veltman, Andrea. and Mark Piper. 2014. *Autonomy, Oppression, and Gender*. Oxford University Press.

- 
- <sup>1</sup> 本研究はJSPS科研費19K12925の助成を受けたものである。
- <sup>2</sup> この変化はあくまでも相対的なものであり、意図についての研究は現代でも盛んに行われている。近年では例えば、神経科学的な観点から、行為の哲学で論じられてきた意図の概念を整理し直そうとする研究が注目を集めている（Pacherie 2008）。
- <sup>3</sup> J. D. ヴェルマンはこれを標準ストーリー（standard story）と呼んでいる（Velleman 1992）。
- <sup>4</sup> これらのほか、本稿では扱わないが、デイヴィッドソンの行為論に対してしばしば指摘される問題に逸脱因果の問題がある。
- <sup>5</sup> 行為者因果説はChisholm(1966)やAlvarez and Hyman(1998)において支持されている。
- <sup>6</sup> ここで批判されるのは、Parfit(1984)での議論である。
- <sup>7</sup> 実際、ブラットマンは他の論文で、コースガードの実践的アイデンティティのアイデアを高く評価している（Bratman [2001] 2007c）。心理的な連続性や結合に明示的に訴えるかどうかという点では確かに両者は異なるのだが、これがどれだけ実質的な違いであるかについては改めて精査する必要があるだろう。
- <sup>8</sup> Friedman (1986) を参照。また、この問題を含む、階層理論が直面する諸問題の優れた整理として、Taylor (2005a) を参照。
- <sup>9</sup> この批判は、ヘーゲルの実践哲学を背景に「行為者性の社会理論」を主張するR. B. ピピンによって提示された（Pippin 2008）。この点についてより詳しくは、川瀬（2018）を参照。
- <sup>10</sup> 福田（2014）を参照。中でもSchechtman（1996）は、物語的アイデンティティ論の記念碑的な著作である。
- <sup>11</sup> 人格的自律性については、Taylor（2005b）に納められた諸論文を参照。関係的自律性については、Veltman&Piper（2014）を参照。